

平成 22 年度

# 佐和山城遺跡 地元説明会資料

滋賀県彦根市佐和山町・鳥居本町

平成 22 年 6 月 26 日(土)



第 5 調査区と  
佐和山城本丸



第 5 調査区の  
素掘りの井戸

遺跡名：佐和山城遺跡  
所在地：彦根市佐和山町・鳥居本町  
調査期間：平成 22 年 4 月～6 月  
調査面積：平成 22 年度 1,052 m<sup>2</sup>  
調査原因：中山間地域総合整備事業(ほ場整備事業)  
調査依頼：滋賀県農政水産部  
調査主体：滋賀県教育委員会  
調査機関：財団法人滋賀県文化財保護協会

調査主体 滋 賀 県 教 育 委 員 会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

# 1. 佐和山城遺跡の概要

## (1) 佐和山城の位置と歴史

佐和山は標高約 233mの独立丘陵です。当地は北側に入江内湖、西側に松原内湖をひかえ、さらにその西側には琵琶湖がひろがっています。そして、東側には下街道（江戸時代の朝鮮人街道）と中世東山道（江戸時代の中山道）が通過し、北側には朝妻湊、西側には松原湊を控えた水陸交通の要衝でした。また、犬上郡と坂田郡の郡境にあたり、近江南北（江南、江北）の境目にあたります。

佐和山城の築造時期は、鎌倉時代初めに佐々木氏の一族佐保氏が館を構えたのが始まりと伝えられます。その後、佐々木氏は六角氏と京極氏に別れて対立、戦国時代には近江の覇権をめぐって六角氏と浅井氏が戦うなかで、佐和山城には六角氏家臣小川氏が城主として入り、この地域を軍事的拠点に位置付け、境目の城として争奪戦を繰り広げました。

戦国時代、佐和山城は東国をおさえる重要拠点として攻防の舞台となり、元龜元年(1570)当時、浅井氏家臣磯野員昌が城主をつとめていましたが、織田信長がこれを攻めて、元龜2年からはその家臣丹羽長秀が城主となりました。また、豊臣政権においても佐和山城は地域支配の拠点としての役割を担い、有力家臣の堀秀政や堀尾吉晴が城主となっています。特に、秀吉の重臣石田三成の本城であったことで知られています。三成は領内から夫役を徴発して「惣構の普請」（「須藤通光書状」下村文書）を行い、その長い歴史のなかで最大規模の城になったとされています。

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦で三成が敗れると、佐和山城は3日後に落城し、徳川家康の命により井伊直政が新しく城主になります。そして、直政没後の慶長9年から彦根山に彦根城の築城が始まると佐和山城は廃城を迎えました。

## (2) 佐和山城の構造

江戸時代後期に描かれた『佐和山城絵図(さわやまじょうえず)』や現存する遺構から城の構造を考えると、佐和山城は山頂の本丸を中心として各尾根上に法華丸・太鼓丸・二の丸・三の丸・西の丸を配し、各所に土塁や尾根を断ち切る堀切(ほりきり)を設けていることがわかります。石垣は石田三成段階に構築されたと考えられますが、本丸・二の丸・太鼓丸の一部にしか残っておらず、全体像はよくわかっていません。現在、山下には東側の中山道に面して大手土塁が残り、その中央の虎口(こぐち)に大手門があったと推定されます。

## (3) 調査の経緯

佐和山城およびその城下町についての発掘調査は、昨年度から実施している県営ほ場整備事業に伴う調査が、初めてとなります。平成21年4月から9月にかけては、「奥ノ谷」と呼ばれる地区で発掘調査を行いました(対象面積 2,281 m<sup>2</sup>)。その東側では今も、谷口部を閉塞する土塁の痕跡(畦や畑等)や、内堀の痕跡(河川)が確認できます。発掘調査では、屋敷地を囲む溝や堀が見つかったほか、石組遺構や橋状遺構などを検出しました。『佐和山城絵図』に「侍屋敷」と記されたとおり、ここには16世紀後半代の武家屋敷地が営まれたことがわかりました。

また、平成22年2月から3月にかけては、「奥ノ谷」の東側、土塁・内堀と当時の主要な道路である「本町筋」の間において、発掘調査を行いました(対象面積 548 m<sup>2</sup>)。内堀がさらに東側に広がる状況や、屋敷地を囲む溝や掘立柱建物・井戸・道路(「百々町筋」)などを検出しました。これらの遺構からは16世紀後半の遺物が出土し、土塁・内堀の外側に広がる佐和山城城下町を構成する町屋であることがわかりました。遺物には鍛冶に用いるフイゴの羽口や鋳物に用いるとりべもあり、城下町に金属製品を生産する工房があったと推定されます。

今年度の発掘調査は、これら以前の調査地の東側において4月から再開しました。調査対象地は1,052 m<sup>2</sup>で、大半が「本町筋」の東西に広がる佐和山城城下町と推定される箇所にあたります。

『佐和山城絵図』 井伊家伝来の佐和山城絵図3枚が彦根城博物館に所蔵されています。その内の1枚には文政11年(1828)の墨書があります。

## 2. 発掘調査の成果

今年度の発掘調査対象地は「本町筋」西側の第3調査区と東側の第4・5調査区、外堀とされる小野川東側（外側）の第6調査区です。遺構には掘立柱建物や井戸・溝などがあります。出土した遺物のほとんどが16世紀後半代のものであることから、これらの遺構は佐和山城の城下町の町屋を構成するものと考えられます。

### (1) 主な遺構

#### 掘立柱建物（第3～6調査区）

掘立柱建物の柱穴を多数検出しました。1軒ずつの建物の様子を明らかにすることはできませんでしたが、当時の道路や外堀（小野川）などの方向（東西あるいは南北）に沿って柱穴が配列されるものと思われます。なお、湧水の多い土地条件から、柱根が腐らずに残ったものもありました。また、柱が沈みこまないように穴の底に石を据える柱穴もあります。据えた石の大半は佐和山丘陵を構成するチャートで、近辺で簡単に拾えるものですが、中には砥石や五輪塔を使ったものもあります。

#### 井戸（第3～5調査区）

素掘りの井戸が各調査区で1基ずつ見つかりました。直径は1.3～1.9m、深さは0.5～1.7mで、いずれも粘土層下の砂礫層まで掘り込まれています。昨年度の発掘調査でも、城下町部分では多数の井戸が見つかりましたので、各屋敷地に1基ずつの井戸があったとも考えられます。第5調査区で見つかった井戸には、たくさんの石が入っていました。使われなくなった後に投げ込まれたと思われます。石の中には、砥石2点や石臼の破片12点が含まれ、そのほかに瓦片4点もありました。

#### 溝（第3・6調査区）

南北方向あるいは東西方向の溝を複数条検出しました。幅は70～80cmと20～30cmの2種類がありますが、昨年度の調査で見つかったような幅2～3mの大規模な溝は見つかりません。大規模な溝は屋敷地と屋敷地を区画する性格を持っていると考えられますが、今回見つかった中・小規模の溝のほとんどは、屋敷地の中をさらに区画する溝となるかもしれません。また、第6調査区では小規模な溝2条が幅約2.4mの間隔で平行して並んでいました。これらは、道路の側溝となる可能性もあります。

#### 「本町筋」（第3調査区）

現在も生活道路として使われている南北方向の「本町筋」の道路の様子を確認する目的で、2箇所で断ち割りを行いました。その結果、佐和山城時代のものと考えられる道路遺構が、現在の道路面から約70cm下で見つかりました。当時の道幅は最大1.5m程度と考えられ、十分に人がすれ違えたと考えられます。西側には浅い側溝（幅20～30cm）も残っていました。この道路はその後、江戸時代に盛土をして幅2.0m程度に拡幅され、近代以降さらに2度の盛土・舗装をして現在の姿になったこともわかりました。

#### その他

調査対象地の城下町の遺構密度はあまり高くありませんでした。これは、遺構がないのではなく、佐和山城が廃城された江戸時代以降、水田を作る際に城下町の生活面がかなり削り取られてしまったため、深く掘り込まれた遺構しか遺存していない状況を示しているとみられます。

### (2) 主な遺物

各調査区から出土しました。少量の縄文土器や須恵器のほか、大部分は16世紀後半に比定されます。

#### 土器・陶器類

瀬戸美濃焼の天目碗・擂鉢・皿、土師皿などがあります。

#### 金属製品

元豊通寶・元祐通寶といった銅銭や鉄砲玉が掘立柱建物の柱穴などから出土しました。2種の

銅銭はともに北宋銭で、それぞれ初鑄は 1078 年と 1086 年です。多数日本に輸入されていますが、これらは中世末期から江戸時代初頭にかけての日本で模鑄銭が数多く作られており、その可能性もあります。鉄砲玉は昨年度の「奥ノ谷」調査区での出土例に続き 4 例目です。

#### 石製品

砥石や石臼・五輪塔があります。第 5 調査区の井戸からは、前述のように石臼が 12 点出土しました。いずれも別個体の破片で、接合するものはありませんでした。

#### 木製品

腐らずに残った掘立柱建物の柱が多数見つかったほか、ヘラ状木製品も見つかりました。

#### その他

第 5 調査区で 5 点の瓦が見つっています。いずれも平瓦です。

### 3. 調査成果からわかったこと

#### (1) 今回の調査成果からわかる佐和山城の城下町の様子

昨年度の発掘調査に引き、今年度も佐和山城の城下町部分、とくに「本町筋」近辺の発掘調査を行いました。検出した遺構から、内堀と外堀の間に町屋が広がっていたことが再確認できました。一方、外堀の外側（東側、第 6 調査区）においても同様の遺構が検出されたことから、城下町がさらに広がっていたことが新たにわかりました。ただし、見つかった遺物はそれほど多くないため、今回の調査区に居住した人々の生活については、具体的にはわかりませんでした。

#### (2) これまでの調査成果の総括

昨年 4 月から始まった県営ほ場整備事業にともなう今回の一連の発掘調査は、石田三成の居城としてよく知られている佐和山城およびその城下町の初めての調査であり、これまで絵図や現況の地割などから推測されていた佐和山城の一部がすこしずつ明らかになってきました。これまでの調査成果を以下に簡単にまとめてみたいと思います。

##### 城内の調査成果

今回の発掘調査は、佐和山城の本体となる丘陵上の郭群におけるものではありませんが、「奥ノ谷」調査区は土塁や内堀に東側を限られた城内にあたり、『佐和山城絵図』に「侍屋敷」と書かれた場所です。見つかった遺構は主に山際を巡って掘られた大規模な溝（堀）で、これは屋敷地を区画する性格を持つと考えられます。そのほか、掘立柱建物の柱穴や浄水目的の石組遺構、溝を渡る橋状遺構などもありました。多数の遺物が出土していて、その年代は 16 世紀後半代が主体です。特に、溝から出土した桐文銅製紐金具は、それを好んで用いた豊臣秀吉が次々に重臣を配置したという佐和山城の特性を物語るものとして、多いに注目されます。これら遺構や遺物から、ここには「侍屋敷」の記述通り、家臣団の屋敷地があったといえます。

##### 城下町の調査成果

土塁や内堀の東側では、城下町の町屋が広がっている様子が確認できました。内堀に比較的近い箇所では大規模な区画溝も見つかるなど、城下町にも城内と同様の屋敷割があったことがわかってきました。また、内堀と外堀の間、外堀の外からも生活の場となる掘立柱建物の柱穴や井戸が多数見つかりました。このほか、「本町筋」・「百々町筋」という城下町の主要道路の遺構も確認され、「百々町筋」と大規模な区画溝が交差する箇所では、道路下を通る石組暗渠がありました。加えて、鍛冶・鋳物に関連する遺物（フイゴの羽口・鉄滓・とりべ）も出土したことから、武器・武具類を製作する鍛冶職人の工房があったこともうかがえます。

以上のように、これまでの発掘調査により、従来実態がよくわからなかった佐和山城およびその城下町の景観を今後復元していく上で、きわめて貴重な情報を得ることができました。

最後になりますが、発掘調査が円滑に進められ、こうした重要な成果が得られたことは、ひとえに地元の皆様や関係者の方々のご理解・ご協力の賜と感謝いたしております。厚くお礼申し上げます。



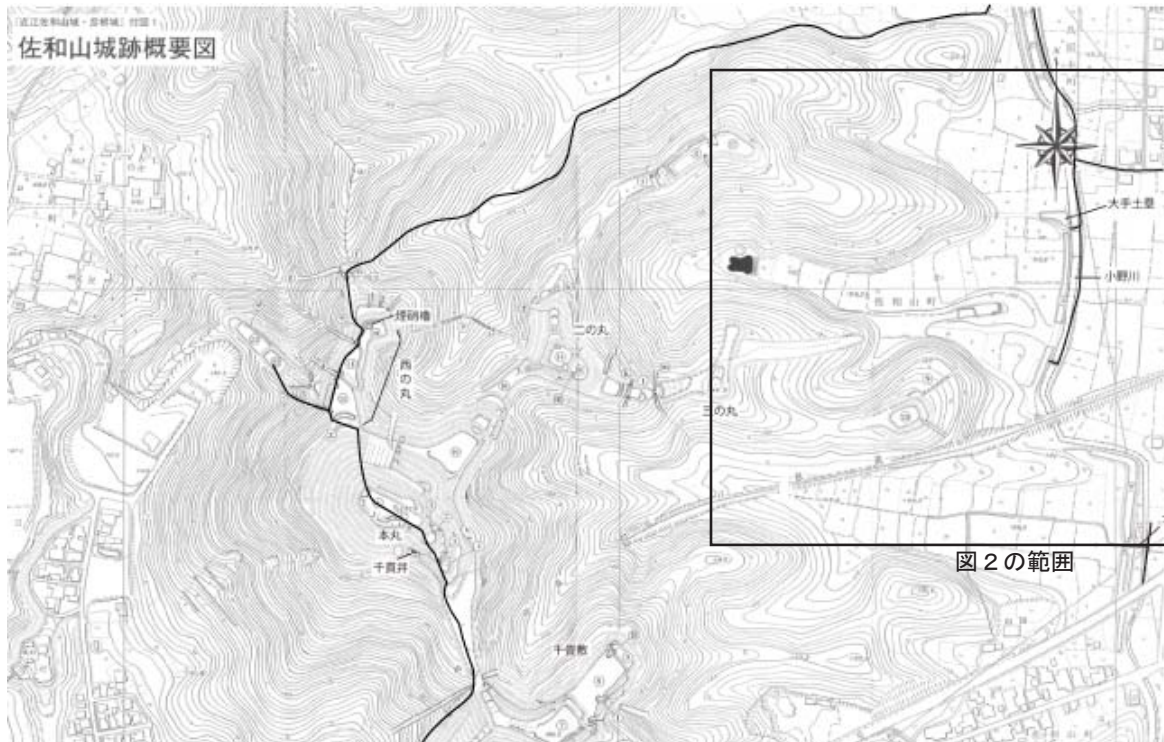


図1 「佐和山城跡概要図」(中井均氏作成、『近江佐和山城・彦根城』サンライズ出版 2007 年より)

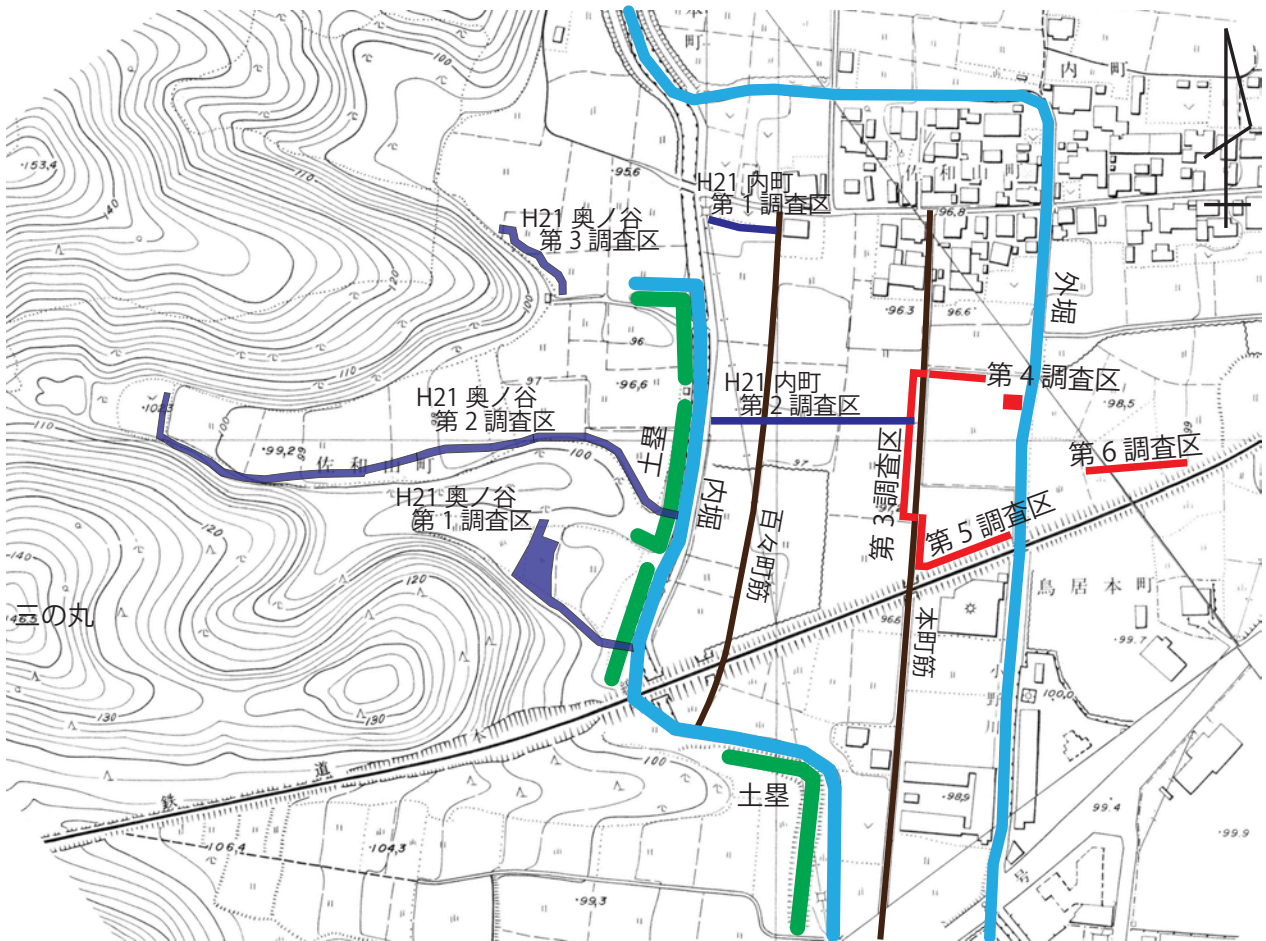
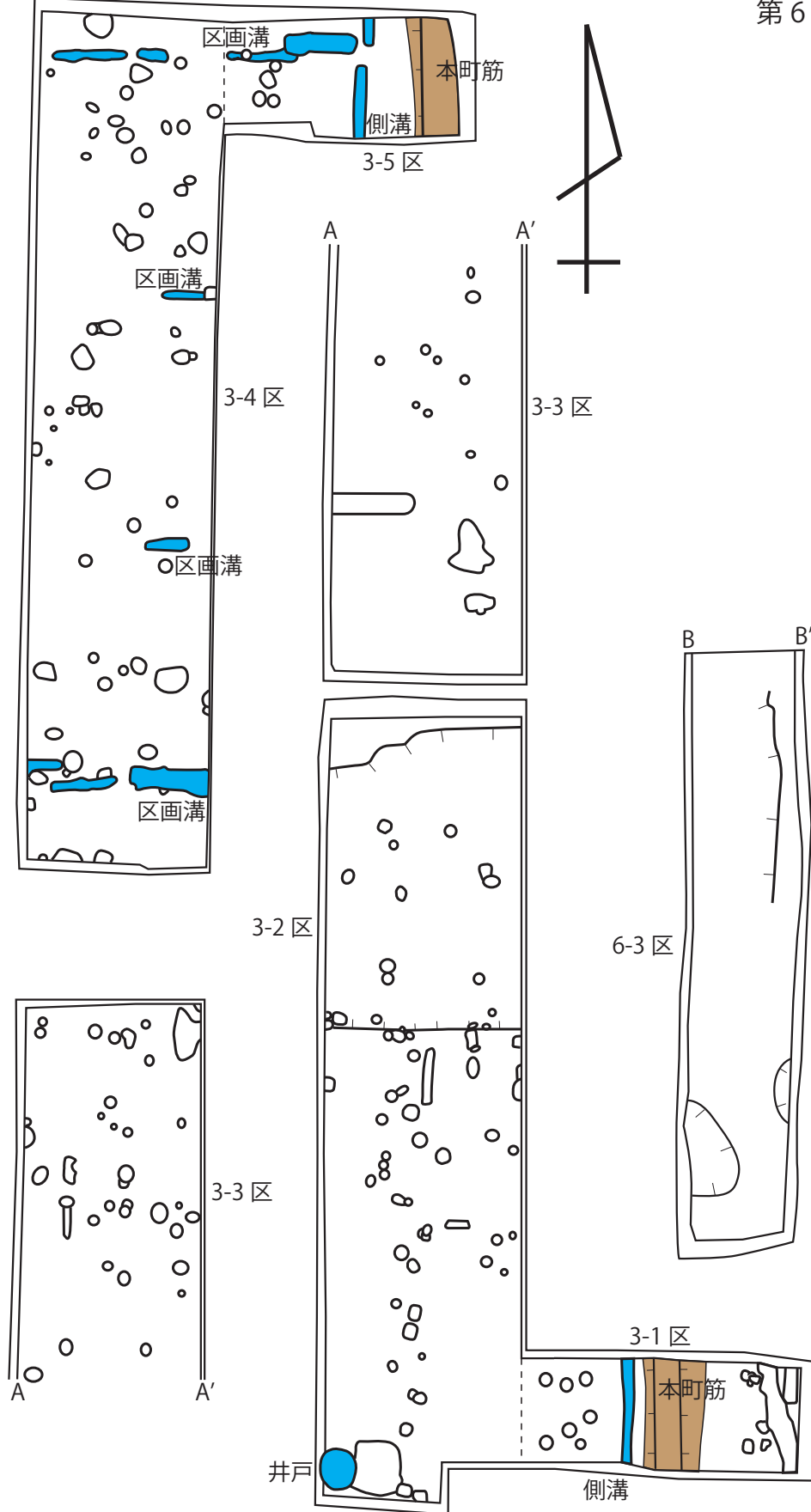


図2 佐和山城遺跡 調査区位置図 (S=1:4,000、今年度調査地は赤色部分)

第3調査区



第6調査区

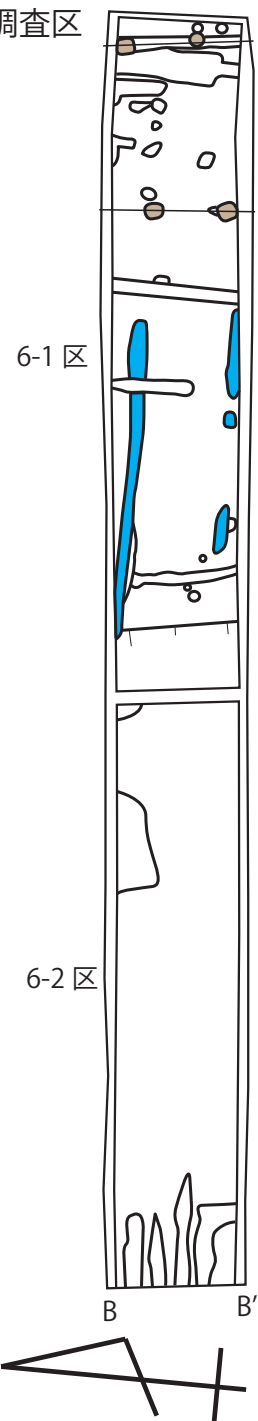


図3 佐和山城遺跡 遺構平面図① (S=1:200)

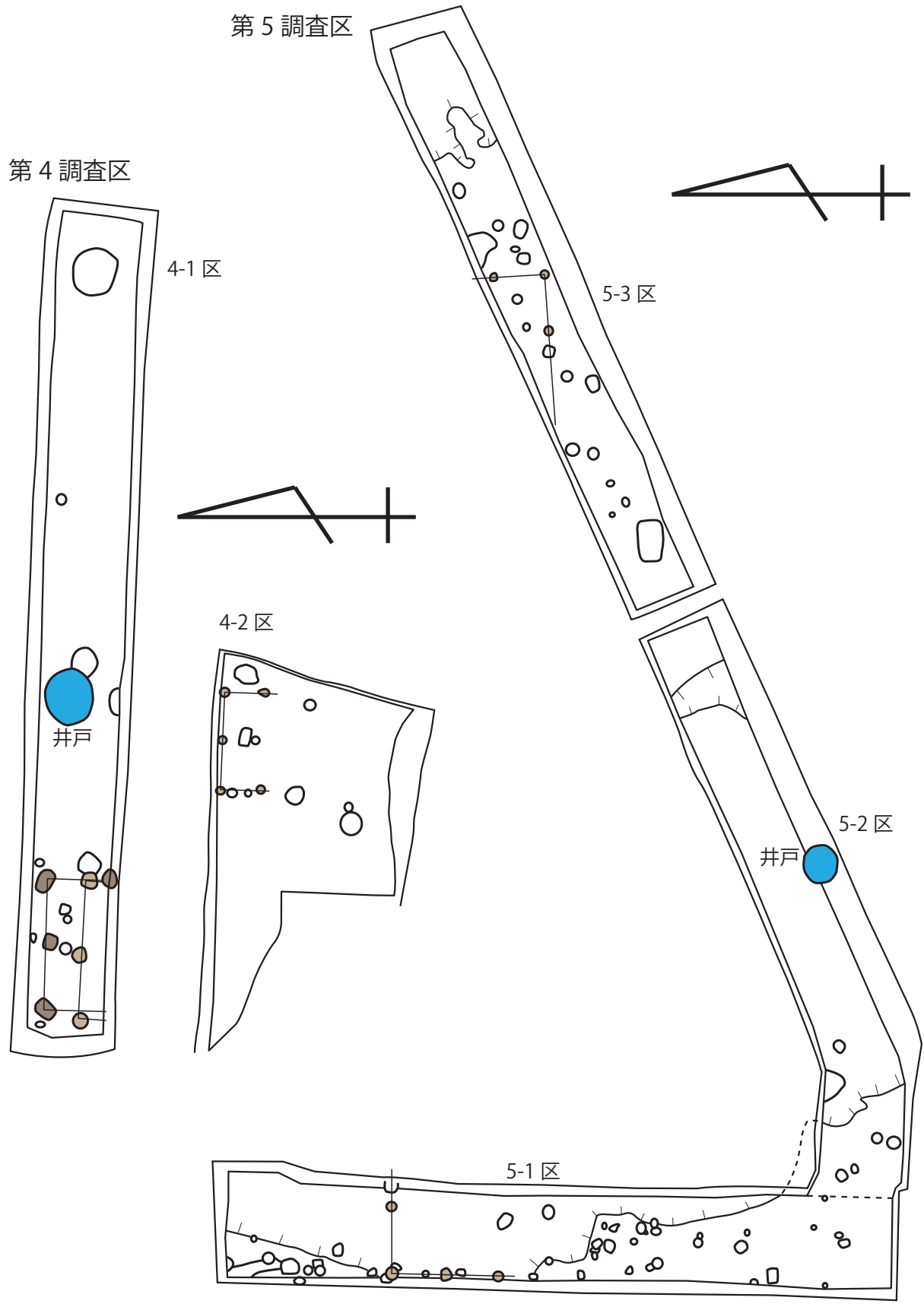


図4 佐和山城遺跡 遺構平面図② (S=1:200)





3-1 区「本町筋」



3-2 区 木柱



3-5 区「本町筋」



3-3 区完掘状況  
(北から)





3-4 区完掘状況  
(南から)



3-4 区柱穴から見つかった五輪塔  
(西から)



4-1 区完掘状況  
(西から)

4-1 区井戸 (南から)







4-2 区完掘状況  
(南から)



5-1 区完掘状況  
(北から)



5-3 区完掘状況 (西から)



6-1 区作業風景 (東から)